

「いのちの授業」を30万人に

向き合う



6歳の景子が小児がんで旅立って10年目の2005年1月、経営企画室次長を務めていた会社を早期退職し、いのちをバトンタッチする会を設立した。

「お嬢ちゃんが残してくれたことを大切にバトンタッチしたらいいじゃないですか」という言葉に覚醒し、会社に勤めながら学校などで自分の体験を話すボランティアを続けていた。多くの人がいのちの大切さを感じ、涙を流してくれた。「景子が生かされている」と感じられ、救われるように思っていた。

04年夏に母が脳梗塞で倒れ、介護施設をいくつか訪問した。当時46歳だった自分と同じ世代の人も事故や若年性認知症などで入所していた。「いま自分も倒れることがある。人生の意味とは？」「人生二度なし。景子の分まで生きる」。早期退職して「いのちの授業」を人生の仕事にすることにした。

景子の弟はまだ中学2年。妻

は仕事に就き、活動も支えてくれた。無名の講師に講演依頼がどんどん来るほど甘くない。予定無しの日が続いて不安の日々だった。初めての講演依頼の電話を終えた時、「ありがとうございませう」と手を合わせた。

いのちの授業では、6歳までの「いのち」を精いっぱい輝かせた景子の姿をありのままに語る。最後に「生き抜く、支え合う、ありがとうを大切にしてください」と「いのちのお願い」をしている。園児や小中学生だけでなく、教育・医療福祉関係、企業研修向けのプログラムもある。今月で設立20年、30万人以上に語りかけてきた。

14年にはいのちに向き合うことを凝縮した絵本「6さいのおよめさん」を出版し、18年度から小学校の道徳の教科書の一つに採択されている。絵本は23年夏に完売して絶版状態だったが24年10月に復刻・重版した。

「私もこんな経験をした」。話を聞いてくれた人もそれぞれの現実を背負っている。私を通じて「いのち」を見つめ、その人なりに「いのちのまなざし」を芽吹かせ、幸せになってほしい。私にできることは小さなきっかけをつくることだと思っている。(1)の項おわり